

第 10 回市史講座ミニレポート：令和 2 年 1 月 18 日（土）

女たちの行商－恵曇の魚商人と大根島の花売りさん－

山本志乃先生（旅の文化研究所研究主幹）



今回の市史講座では、旅の文化研究所研究主幹の山本志乃先生に、恵曇（えとも）と大根島（だいこんしま）の女性たちによる「行商」について、民俗学の視点からお話しいただきました。山本先生は、『松江市史』通史編 5「近現代」（2020 年 3 月刊行予定）でも、「魚と花の行商」という項目を執筆されています。

はじめに

山本先生はまず、鎌倉時代の《東北院職人歌合》に描かれた山伏のような行商人の姿を紹介し、「行商人は商人の原点」と話されました。また、女性と商業との関わりは古く、室町時代の《七十一番職人歌合》に描かれた職人の4分の1は「米売り」「豆売り」などの女性だったそうです。さらに、交易が起こりやすい場所とは水陸の接点である場合が多く、恵曇も大根島も、まさにそうした場所でした。

1. 恵曇の魚商人

「恵曇の浜」は、古く『出雲国風土記』にも紹介されており、中世には塩田や漁業の記録が残ります。この地が歴史上重要になったのは、天明 7 年（1787）に佐陀川が開通し、松江藩が江角に御番所（ごばんしょ）を設置してからでした。寛政 6 年（1794）には武代に川方（かわかた）という役所が置かれ、島根・秋鹿・出雲・楯縫四郡の年貢米を収納し、移出の任にあたりました。

近代に入ると、江角に明治 34 年（1901）に県立水産試験場が設置され、明治 40 年（1907）には江角商業株式会社が設立されます。魚市場経営に加え、専用船による運輸業も始まり、大正時代には集魚灯会社・鉄工所・造船所・製氷工場・缶詰工場が設立されるなど、恵曇の地は大いに発展したそうです。

そうした中、明治から大正にかけて漁業組合が設立され、江角と古浦それぞれの組合が魚市場を運営するようになりました。魚売りを商売とする家が増え、「魚商人（ぎょしょうにん）」と呼ばれる女性行商人が活躍するようになります。恵曇村では、明治 44 年（1911）に「行商表彰規定」を定め、各区から推薦された品行方正で勤勉、他の模範となる行商人を村費で表彰しました。また、地元の海産物業者が行商人に出資し、雲南地域を連れ歩いて商売させるなど、村を挙げて魚中心の商売を盛り上げたそうです。こうした行商では、鮮魚とともにカマボコなども売り歩き、祝言の料理一切の注文を受けるといったこともあったそうです。

やがて太平洋戦争が始まると、昭和 18 年頃から統制経済により鮮魚販売が制限されるようになりましたが、江角・古浦・手結・御津の行商人は「配給人」として商売することが公的に許可されました。このため、魚商人たちは戦中・戦後の大きな断絶を経験せず商売を継続させることができたそうです。

魚商人の移動手段としては、戦前まで主に船が使われていました。明治 40 年代には江角商業株式会社の貨客船や合同汽船などが佐陀川を往来しました。昭和初期には、行商人専用船として個人営業の船が就航し、馬潟方面、朝酌方面、揖屋方面などさまざまな行先へとカゴを担いだ魚商人を運びました。

昭和 25 年（1950）年に魚介類の統制が解除され、行商が本格的に復活しますが、専用船は復活することなく、魚商人はバスを使うようになりました。運搬道具はこれにあわせて、水漏れしないよう、ブリキ製のカンに変わりました。昭和 27 年、一畑電鉄が恵曇・松江間のトレーラーバスを開始し、昭和 33 年まで運行されました。昭和 50 年代には「魚商人専用バス」まで運行されました。

魚商人の得意先は「ジバン」と呼ばれ、彼女たちにとっての大事な財産だったそうです。親の得意先を引き継いだり、年をとってやめた人の得意先を譲り受けたりして継承されました。得意先のお客さんも、他の行商人が来ても買わないなど、暗黙のルールがあったそうです。一方で、魚商人自身が客として得意先で買い物をすることもあり、さらには得意先の子どもを海水浴に招いたり、縁談の世話を頼まれたりするなど、豊かな共生関係がありました。

2. 大根島の花売りさん

大根島は、『出雲国風土記』では「たこしま」と記載されています。近世には島内に波入（はにゅう）・入江（にゅうこう）・遅江（おそえ）・二子（ふたご）・寺津（てらつ）・亀尻（かめじり）・馬渡（まわたし）の 7 村が成立しました。人口密度が高いのが特徴で、約 6 キロ平方メートルの面積に、近代以降は常に 5000～6000 人ほどの人口がありました。住宅地以外はほとんど畑であり、水田はわずかで、小規模経営が大半でした。

近代以降、島の主要ななりわいは薬用人参・養蚕・漁業でしたが、1960 年代から花卉栽培が登場し、1970 年代にかけて最盛期を迎えました。特に牡丹栽培は、接木の新技術によって大量生産が可能となり、連作のきかない薬用人参栽培の耕地利用ローテーションにうまく組み込まれていったそうです。

昭和初期になると、島の人口は飽和状態となって出稼ぎ者が増加し、戦後はさらに女性の行商人が増えていきました。これにつれて、扱う品目も中海の魚介類から、牡丹苗、観葉植物、苗木等に移っていきました。そうした女性行商人の行先は、はじめは数泊程度の近場であったものが、後に数週間～1・2ヶ月程度の長期滞在となり、沖縄を除く日本全国へと広がっていったそうです。

そうした広域的な移動手段としては、鉄道が利用されました。実の姉妹など気の合う数人でグループをつくって行動し、商売用の牡丹苗などは駅留の輸送荷物で留守宅から発送してもらったそうです。当時の商売先はだいたい飛び込みで、役所や会社などが多かったそうですが、時代の変化とともにセキュリティが厳しくなって簡単に立ち入れないところが増え、こうした行商活動ができたのは平成10年頃までだったとのこと。そうして稼いだお金は、自分のためではなく、家のため、子どものため、学費や生活費として使われるのが女性行商人の特徴でした。

おわりに

まとめとして山本先生は、以上のような女性の行商の広がりや、鉄道・バスといった近代的な交通網の普及とともにあったことを指摘されました。また、こうした行商の活動には、女性ならではの暗黙の了解事項や細やかな意思伝達の手段があり、そこには、ただモノを売りに行くだけではない（自分も買って帰り、時には得意先の宣伝までしてあげる）、「共に生きる」ためのなりわい、学ぶべき相互扶助のあり方が見える、と話されました。